

浦島太郎



始皇帝は東方の五山にある不老不死の仙薬を求め、お気に入りの家臣除福という占師方士に童男童女大勢を与え、沢山の船を備え、何年かかっても東方の国にある「不老不死の仙薬」を見付けて持って来るようにと命令した。

「不老不死の仙薬」とは言霊布斗麻邇の原理に基づく政治は万世一系に変わる事のない恒久平和の世の実現を可能にするもの、アイウエオ五十音・三種の神器の原理である。このことから秦の始皇帝が秦朝を万代に安定させようとして求めたのである。だが、始皇帝が除福を来朝させた紀元前二百二十一年は、原理を隠して物質科学文明を興そうとする計画が実行に移される寸前の第七代孝霊天皇の時である。

「春の日の霞める時に住江の岸にいで居て釣船のとほろつ見れば古の事ぞと念ほゆる水の江の浦島の児が鯉魚釣り……」（万葉集一七四〇）

浦島太郎は竜宮の乙姫はじめ、大勢の人の歓迎もてなしを受けた。そして浦島は夢心地となり、宴会攻めの思わぬ三年を過ごした。そしていよいよ故郷に帰ることとなった。乙姫は竜宮城のお土産として玉手箱を、決して開くことのないよう「と言って浦島に与えた。

別れを惜しみながら再び、亀の背に乗って故郷に帰って行った。しかし竜宮である日本の皇室は何事も無く浦島除福を送り返し、事態を乗り切る事が出来た事に胸をなで下ろした事である。物語には乙姫と浦島とはお互いに名残を惜しんだとあるが、実は全く反対のことを表すための皮肉の修飾である。

乙姫とは音秘めの謎である。上古の霊知り天皇のことをも意味する。人間の精神の構造を創造意志の法則として捉え、その実体を言葉の原理として把握し、それを秘め蔵している、の意味である。それ故竜宮城とは日本のことであり、又日本の当時の皇室のことでもある。当時中国は日本のことを東海の姫氏国とも呼んでいた。

玉手箱とは宝石を入れておく、小さな箱のこと。玉とは言霊のことを言う。別名玉匣ともいった。この玉匣の言葉は「蓋」又は「明ける」の枕詞となった。まことに優雅な表現であるが、玉手箱の本来の意味は言霊の埴土札を入れる箱（ヘブライの神宝に黄金のMana壺とあるがこれと同じ）であり、それを開けば人間生命意志の構造をそのまま言葉として表わした人類永遠の真理が入っている。

神武天皇以後の世界文明経営の大方針によって、玉手箱は封印しておかなければならなかった。除福が来朝した時代は玉手箱の中に入るべき言葉の麻邇名を抜いた空っぽの箱でしかなかった。

百千たび浦島の児は帰るとも貌姑射の山はときなるべき（千載集）
常世辺に住むべきものを劔刀おのが行からおそやこの君（万葉集）

初めの歌にあるはこやの山とは方壺山と列子にある日本の高千穂の峰のことである。浦島除福が幾度求めて来ても、言霊の原理は教えませんよ、ということである。次の万葉集の歌は先の浦島の児の歌の返歌として詠まれ、常世辺すなわち外国に住んでいればよいものを、判断力の根本原理を求めて日本にやって来て失敗した愚かな人よ、と除福を笑った歌ということが出来る。

除福が故郷に帰り着いた時は、彼の主人の秦の始皇帝はすでにこの世になく、浦島が竜宮で遊んでいた三年とは実は、それはそれは長い年月であったのだ。途方に暮れた浦島が開けてはならないと言われた玉手箱の蓋をとってみると、中から白い煙が立ち昇って中には何も入っていなかった。浦島はたちまち白髪の老人となってしまうた。

玉手箱の中身が何であつたかを、言霊学によつて明らかになり、皇祖皇宗の世界経営の定めるように、二十世紀にその蓋が開かれ、不老不死の仙薬の言霊の原理に従つて人類の新しい文明創造の歴史が始まるうとしている。

カチカチ山

昔ある処でおじいさんが悪さをする狸を捕まえて家の軒先に吊るしました。狸はおじいさんの留守におばさんをだまして殺し、自分がおばさんに化けて死んだおばさんの肉を狸汁とっておじいさんに食べさせました。そこで狸は正体を現わし「ばば食ったじよ。流しの下の骨を見る」と悪口を吐きながら山へ逃げて行ってしまいました。おばさんの骨を見て嘆き悲しんでいるおじいさんの処に兎が訪ねて来ました。話を聞いて兎はおばさんの仇討ちをする約束をしました。早速兎は山に狸を訪ねていつしよに柴刈りに行こうと誘いました。柴を背負って帰る途中、兎は狸の後ろでカチカチと火打石を打ちました。狸が怪しんでたずねると「ここはカチカチ山ですよ」と答えます。そのうちに狸の背中の柴に火がついてぼうぼうと燃え出しました。狸は大やけどをしました。翌日狸が痛がって寝ていると兎が薬売りになって来て、次に兎は狸を誘って川へ魚を釣りに出掛けました。兎は木の船、狸は泥の船に乗りました。泥舟は水に溶けて狸は溺れ死にました。兎はおばさんの仇を討ちました、とさ……。

かちかち山のおとぎ話

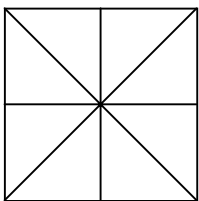
言霊の原理と宗教と科学との関係にまつわる人類の歴史の粗筋を予想した予言的物語である。さておじいさんは上古の日本の天皇、おばさんは日本の政治家や学者と見ると話の筋が通る。ここでこの物語の主役の一人である狸の意味に付いて考えて見よう。狸親爺たぬきじいという言葉がある。ずるがしこい老人という意味であるが、「あの狸親爺」と蔑む言葉の中に「世事にたけて案外に真実をついて来る老人」という気持ちが含まれている。狸を一名マミという。東京に狸穴という地名がある。マミは真実まみ・実相ということ。誰が見ても納得する事物の実相を意味している。仏教では諸法空相・諸法実相を説明し、禅坊主は「柳は緑、花は紅くれなゐ」などと洒落た表現をする。「菜の花や月は東に日は西に」と俳句は動かし難い実相を詠む。

また狸は田抜きの意である
かけそばの上に揚げ玉をのせたものを狸そばという。揚げ玉とは天ぶらの中身が抜けたものである。そこで田抜きの田とは肝心な内容の意を示している。その内容とは何か。ここで言霊の問題に入る。天照大神は伊勢の裂口五十鈴宮にまつられる神である。裂口代は鈴の枕詞。鈴は人間の口を開けた形で言葉のことを意味している。五十の鈴であるからアイウエオ五十音を意味している。言霊五十音には先天である父母音十七と後天三十三相が揃っていて、人間本来の自由な発想から現象を創造してゆく過程が全て明示されている。五十音図は四角形に区切られて、丁度田の形である。古事記では天照大神は菅田^{みつくた}を耕^かしていらっしやる。言霊図を運用して歴史を創造しているということである。そこで田抜きとは肝心な言霊の原理を欠如しているという意味である。以上のことからこの物語の狸というのは物事の実相は説くが、それを自由に操作運用・整理して歴史を創造して行く能力のない思想ということである。ここでは主として仏教である。仏教は慈悲を説き魂の救済は説くが、そこからは歴史を創造する自由な発想は出て来ない。

二千年以前崇神天皇によって精神の法則である
言霊の原理が人々の意識から隠されてしまつて以来、国民の心の支えとしてこの狸である仏教が輸入された。特に聖徳太子以後は盛んになった。おばあさんである日本の政治家や学者はそれまでは言霊の原理の操作による政治運営に精を出していたが、輸入された仏教思想によって次第に洗脳されて行った。おばあさんは殺されてしまったのである。こうして奈良朝・平安朝と時代が進むにつれ狸の思想がおばあさんの頭に入り込み、おばあさんに化けてしまった。即ち仏教は古神道に代わつて日本の国教となり、天照大神は実は奈良東大寺の大日如来なのだと言われ、聖武天皇は自らを「三宝の奴」(三宝は仏・法・僧のこと)と称するまでになった。おじいさんがおばあさんの肉を食わされた、という事になり、役行者や菅原道真などの古神道に明るい人々が排斥されたのである。

狸が去った後におばあさんの骨が

散乱していた。下の図を聖書では「アダムの肋骨」という。言霊原理の象徴であるが、その図形の中に言霊が書き入れられることによって初めて人間の精神構造を表わす言霊図が出来上がるのであるが、骨組みだけでは実体は分らない。これが同床共殿の制度が廃止され言霊の原理が隠されて閉まった以後の日本神道の姿である。神道にはいろいろな儀式がある。神殿の構造にも意味がある。皆言霊の原理を表徴しているもののだが、その意義を神主自身知る事無く唯猿芝居をしている。おばあさんの死骸の骨を大切に昔を偲んでいるのが現在までの神道である。



こうして悪たれをたたきながら狸は山へ逃げて行った。今なおこの山の名は有名である。高野山金剛峰寺、比叡山延暦寺、身延山久遠寺などである。それら山の中では狸入道が緋や紫の衣を着て、般若湯に顔を赤くして、ふんぞり返って世の中の戦乱の世相にただ手をこまねくだけで暮らして来た。このような表現は何も仏教をけなすために言っているのではない。言霊の原理が隠され、聖や仏が世にいなくなった仏教でいう像法・末法の世の真実の姿であり、歴史の現実なのである。

骨になってしまったおばあさんの姿を見て嘆き悲しんでいるおじいさんの所へ兎が訪ねて来た。そして殺されたおばあさんの敵討ちをすることをおじいさんに約束した。……ここで兎が登場した。こじきでは兎は大国主命の章で「稲葉の白兎」として出て来る。兎は有裂つひきの意である。ウとは五官感覚で捉えられる世界のこと。その世界に存在する万有を裂く即ち分析してその構造や性質を解明しようとする事で、一般に科学のことである。この科学を表徴する兎の出現でこのおとぎ話の主題である三千年にわたる日本と世界の文明創造の主役が全て揃ったこととなった。第一の主役は日本の古神道である言霊原理の自覚者・日本の天皇であり、第二は言霊原理が隠された後創世された宗教（仏教）であり、第三の主役は物質世界の真理を究明する科学である。古事記はそれら主役のそれぞれの精神構造を神の名前で表現している。第一の言霊原理の運用の精神に天照大神、第二の宗教・哲学の精神は

月読命、第三の科学精神に須佐之男命である。この三者の三つ巴の葛藤が日本と世界のここ三千年の歴史を織りなして行くこととなる。

兎は山に狸を訪ねて、柴刈りに誘った。めいめい柴を背負って山道を行きながら兎は狸の後ろでカチカチと火打ち石を打った。狸が怪しむと兎は「ここはカチカチ山だ」と答えた。狸の背中に火がついて大火傷を負った。……柴とは桃太郎のところにも出て来たが、霊葉の訛りである。言霊または言葉の道理を意味する。カチカチ山とは神の道の山の意で、兎と狸がカチカチ山へ柴刈りに行ったとは、物事の真理を探る競争を兎の科学と狸の宗教・哲学がしたということである。言霊の原理が隠されてから二千年、世界の文明は宗教と科学によって造られて来た。初めのうちは宗教の方が断然優位であった。ガリレオが地動説を説いてキリスト教会の厳しい宗教裁判を受けたことは有名な話である。

し　か　し　時　代　が　進　み

科学の進歩が早まるにつれて、社会の主導精神は宗教・哲学から科学の手に移って行った。科学は精神の霊ではない物質の火を次々に発見して行った。木を焚く火から第二の電気んの火、そして第三の原子の火を点すまでになった。この原子の火の発見によって従来の社会や国際政治の様相が一変することになった。このそのすべてが兎の科学の進歩によって狸の宗教・哲学の社会に対する指導力を日一日と低下させて行く原因となる。

狸　が　火　傷　で　苦　し　ん　で　い　る　と　こ　ろ　へ

兎が薬売りになって見舞いに来て、狸の火傷に唐辛子を塗ったので狸はますます苦しんだ。……唐辛子の唐は中国を越えた広く西洋の諸国と考えると、唐辛子とは近代物質科学ということになる。近代科学の成果が生んだ巨大な軍備競争、ハイテクの開発による人間生命意識の変革などに対して、仏教を始めとする各宗教や哲学が何らの指導や影響を与えることが出来ないでいる。狸の昏迷はますます深くなって行く。

次に兎は狸を誘って魚釣りに行った

兎は木の船に乗り、狸は泥の舟に乗った。泥の船は水に溶けて沈み狸は溺れ死んでしまった。こうして兎は首尾よくおばあさんの敵討ちをしたのでした。…むかしは魚をナと言った。岩魚などに今でもその名が残されている。魚は名の表徴である。物事の真実の姿を発見して、これに見合った名前を付けること、これが物事の道理を極めることである。兎と狸が魚釣りをしたとは前述と同じく科学と宗教・哲学の真理探究競争であり。科学には発見した真実を一定の言葉と数式で表現する正確さがある。科学の真理は発見者以外の人でも、その示された方法と数に従って実験すれば何時でも同じような結果が得られる。それに対し宗教・哲学などは全てその真実を表現するのに比喻や概念を使う。それは人によって解釈が違って来る。「以心伝心」と言って分る人だけが分ればよい、といった態度である。表現の正確さということで宗教・哲学は科学に到底太刀打ちできない。宗教の墮落・哲学の貧困が叫ばれる今日である。

こうして社会の科学的な近代化が進むにつれて

世の中の指導精神としての宗教・哲学の力は狸の泥の船のように水の底に沈んでしまった。現在イランが叫んでいるイスラム革命なども世界中から全く奇異な目で見られる現状である。そもそも宗教・哲学とは古事記のいう月読命の支配する領域である。闇の中に月の光でうすぼんやりと読む学問という意味である。真実即言葉である言霊の原理を操作する神が天照大神で太陽に譬えられる。言霊の原理から言霊を差し引いて実相だけを残したのが宗教・哲学である。そのため真実は見るけれど、それを表現するのに回りくどい比喻や概念を使う。人によって解釈が異なつて来て物事の姿を薄ぼんやりとしか伝える事が出来ない。それにひきかえ科学は古事記で須佐男命の世界である。須は主に通じる。主とは天照大神である。須佐男とは主を佐ける男の意味で、科学は完成された暁、主である天照大神の精神原理と共に相携えて人類の新しい第三文明時代を創造する。月読命の宗教・哲学はその時までの精神的な繋ぎである。仏教という像法・末法の時代の仏教・キリスト教・儒教や、骨ばかり残っている日本の神道等はやがて崩壊してしまつことを預言したのがこの「カチカチ山」のおとぎ話である。

カチカチ山のおとぎ話はここで終るが
ことの成行きの上で当然考えなければならぬことがある。月が沈めば陽は昇
る。自然現象では当然である。しかし歴史の創造は自然現象ではないから人が
成さねば物事は成就しない。二千年前日本人の意識から隠された言霊の原理は
如何にして復活するか。それは実に泥舟と共に沈んだ狸である宗教・哲学の仕
事なのである。

新たに復活して来た言霊布斗麻邇が

その真理であることを知って、その真理を広く万人のものとする仕事の中に宗
教・哲学は新しい生命が与えられる。昔おばあさんを殺してそのおばあさんに
化けた狸が溺れ死んで、再び逆に本当のおばあさんに生まれ変わること即ち宗
教・哲学が自己の限界を知り、自らの本尊である言霊布斗麻邇に立ち返る役目
の一日も早く気付くことが希望されるのである。その事が成就した時カチカチ
山の物語の真実の幕が下りることとなる。

猿蟹合戦



蟹がむすびを持っていました。そこへ柿の種を持った猿が来て交換してくれと頼みました。猿は手に入れたむすびをすぐに食べてしまいました。蟹は柿の種を蒔いて大切に育てました。柿の木は見事に大きくなり、実が実りました。そこに猿がやってきて実を取ってやろうと木に登り、おいしい柿の実は自分で食べてしまい、青い柿を蟹に投げつけて殺してしまいました。蟹の子が悲しんでいるところへ蜂と栗と臼が来て「よし仇を討ってやろう」と言いました。そして力を合わせて猿を懲らしめ改心させました。とぎ……

蟹は神かに似にである。何故蟹に似ているか、昔神と言えば言霊構造である。それは人間生命の構造であり法則であり、人間はそれによって生きるからである。五十音言霊図のウオウエイ、ワウエエの母音・半母音をそれぞれ蟹の左右二本の手に、キシチヒミリイニの八つの父韻を八本の脚に見立てると蟹の体型は言霊図に似ている。蟹は神似である。

猿は古事記で国津神の猿田彦として出て来る。猿を申もつすすと書くと言葉の意味である。申とは国津神の言葉の意である。古事記にある天津神の言葉というのは言霊の原理に則って制定された言葉を示している。仏教で「仏の言葉は異なることなし」といわれ、キリスト教で「はじめ世界は一つの言葉であった」と説かれた。人間の思考の先天と後天が言霊の原理によってきちんと整った言葉のことである。それに対し国津神の言葉とは発生したままの洗練されていない無秩序で無法則の言葉という意味である。

次に柿の種とは神か気きの意で、これもまた言葉のことである。むすびとは古事記にある高御産巢日たかみむすび・神産巢日かみむすび等の産霊むすびを示し、父韻と母音を結んで子音（現象）を産む言霊布斗麻邇の法則のことである。猿は蟹からもらったむすびを食べてしまった、ということは蟹から教えら

れた言霊による産霊むすびの法則を聞きかじっただけで忘れてしまったことである。しかし蟹は猿から貰った柿の種を大切に育てた、ということは無秩序・無法則な世界のいろいろな言葉を、自分の姿である布斗麻邇の法則に合わせて洗練し育てていったのである。

や が て 見 事 な 柿 の 木 が 実 っ た

整理された言葉の文化が現出した。言霊の原理に基づいて造られた言葉による人類社会が出現した。けれどそこへまた猿がやって来て、熟した甘い実は自分が食べ、未熟な渋柿を蟹に投げて殺してしまった。蟹が猿に殺されることが今日まで二千年間の人類の宿業である。その宿業をキリスト教では原罪と呼ぶ。生まれながらにして人間が背負っている罪である。個人の所為では決して解消することが出来ない罪である。「エホバ言いたまひけるは視よ民は一いつにして皆一の言語ことばを用ふ。今既に此れを為し始めたり……去来我等降り彼処かしこにて彼等の言語をみだし互いに言語を通ずることを得ざらしめんと エホバ遂に彼等を彼処より全地の表面に散らしたまいければ……是故にその名はバベルみだれ）と乱みだれ）と呼ぶる」（創世記第十一章）聖書は人間の精神の原理である人類唯一の言葉が乱れたことを以上のように表現している。同様のことを古事記では速須佐男命はやすさのみこと、勝さびかちに天照大神の菅田みつくだの畦あはな離なち、その溝埋め……」（天の岩戸の章）と書いている。天照大神が耕す田とは言霊五十音が入る五十音図のことである。速須佐男命が五十音図の畦を取り払ったり、溝を埋めたりして言霊で出来上がっている大和言葉の原理を乱したという意味である。言葉が乱れる事から人の心はお互いに完全な理解が困難となり、いろいろな犯罪が起って来る。大本の言葉を乱す罪（原罪）を神道では天津罪といい、それが原因で発生して来る社会全般の罪を国津罪と呼んでいる。

殺された蟹の子が嘆き悲しんでいるところへ

蜂と栗と曰が尋ねて来て敵討ちを約束しました。蜂とは「蜂の比礼ひれ」という神代文字のこと。比礼は靈頭ひあられで、言葉を顕わすものは文字である。神代文字はすべて言霊の原理・法則に則って作られている。栗とは繰くるの意で、順々数える

こと。言霊の操作運用の意である。臼は餅を搗く道具である。餅は百道もちで言霊の数十、その運用法五十、合計百個の原理を表わす。正月の紅白二段の鏡餅はその百個の原理を表徴したものである。



臼はその鏡餅を搗く道具であると同時に、その鏡餅の内容をも表わしている。古事記神代巻は言霊原理の教科書であって、神様の名前を連ねて言霊を示している。最初の天の御中主の神・言霊ウから火之迦具土神・言霊ンまで丁度五十神・五十言霊が揃い人間の精神要素五十個を表わしている。次の五十の神名は言霊の操作法を表わし、合計百神が出揃ったところで言霊の神である伊耶那岐・美二神の仕事は終る。日本書紀にはこの状況を次のように述べている。「是の後に伊弉諾尊いざなのみこと・神功かみこと既に竟おへたまひて靈運当遷かむあがりまひなんどす、是を以て幽宮かくれのみやを淡路の洲あわじに構すり、寂然長く隠れまじき」。言霊の自覚する始まりは天の御中主の神・ウであり、百神全部が出揃って自覚が完成し伊耶那岐神が永久に隠られる宮は淡路の洲す（巢す・澄す・静す・皇す）である。このウからスで言霊原理の内容は全部整う。臼とは以上のことを意味している。臼は餅（百道）を搗く道具であると同時に鏡餅の内容でもある。

蜂は神代文字、栗は言霊の操作、臼は言霊原理の全内容と検討してみると、この三つとは蟹（神似）である言霊の原理（布斗麻邇）の更に詳細な内容ということになる。この三者が協力して猿を散々に懲らしめ、降参させて改心させ、蟹の敵討ちをした。現在三千年の暗黒の闇の中から蘇えて来た人間性の正当な言葉の原理を、不完全な色々な言語がもう再びみだ乱すことがないこととなる。蟹は平和に自分の産霊むすびを食べ、精神と物質の両原理を兼ね備えた人類の新しい文明の創造を開始することとなる。

おとぎ話は猿を懲らしめる有様を詳しく伝えている



蜂は猿をチクリと刺し、栗は囲炉裏から跳ねて猿に火傷を負わせ、臼は待ちかまえて猿の上に馬乗りになり、抑えつけて謝らせた、とある。このことは現在通用している言葉による社会の運営が行

き詰まり、生命構造そのものである神似の言葉が世に復活する時の状況を鋭く



示唆しているように思われる。現在まで日本の上古には文字が存在せず、いわゆる神代文字というものは後世の偽作であるというのが通説である。しかし蜂が猿をチクリと刺すということは、近い将来動かし難い事実として蜂の比礼といわれる神代文字が発掘されることを暗示している。現代の学説を文字通りチクリと刺すこととなる。次に栗が跳ねて猿に火傷を負わせる。栗である精神の運用法がその独特の力を発揮して、生命とは言葉であることを広く世に知らせることになるであろう事の示唆である。そして最後に白が猿を抑えつける。生命則言葉の原理と不完全な言葉の論理とが全面的に比較討論の場に取り上げられ、その結果世界の一の言葉として言霊布斗麻邇の原理が精神的憲章となることの暗示である。



舌切り雀

むかし、むかし、ある处におじいさんとおばあさんがいました。その家の竹藪では雀が大勢集まつて楽しく暮していました。ある日、おじいさんが家を留守にしました。その留守に雀がおばあさんの作った糊を食べたのです。おこったおばあさんは雀の舌を切つてしまいました。舌を切られた雀は泣きながら唐の竹藪に遂げて行き、そこでガヤガヤとしがない暮しを続けて行ったのです。時が過ぎました。やがておじいさんが雀のいる竹藪に久しぶりに訪ねて来ました。雀達は大喜びでおじいさんを歓迎し、ご馳走を出してもてなし、帰りにお土産にと軽い葛籠つむぎかごと重い葛籠おもいかごを出し、「お好きな方をお持ち下さい」と申しました。おじいさんは軽い葛籠つむぎかごをもらつて帰りました。開けて見ますと、宝物が沢山出てきました。それを見たおばあさんは「私も……」と出掛けて行き、欲ばつて重い葛籠おもいかごをもらつて帰りました。開けて見ると汚いものや妖怪が沢山飛出して来ましたが、……と々。

スズメはイスズに通じている。

雀 という鳥は人の住む所を、

住家としています。お役人の政治に対する批判を「町の雀のさえずり」などということがあります。そのように国と民・民衆の意味に譬えられます。「舌切り雀」の雀の語源は鈴埋すずめめです。伊勢神宮のことを五十鈴の宮といいますが、鈴の形は人間の口の形をしており、鈴とは言葉を表徴します。特に五十鈴いすずといますと、五十音の言霊の意味を表わしています。五十音の言霊とは、人間の心を構成している五十個の最小要素それぞれに五十音の清音を一つずつ当てはめたもので、心の最小単位である、と同時に言葉の最小単位でもある五十個ということです。

現代の日本社会では全く、

知る由もありませんが、二千年前まで政治道德の基本でありました言霊の原理

から見ますと、五十音言霊をそれぞれの魂の中に埋めていただき、五十音言霊をその実相に合わせて組合せた神の国の言葉である、古代大和言葉を使って生きているのが日本の国民なのであります。そういう意味からいって、このおとぎ話の中のおじいさんとは昔の古代精神文明が華やかであった時代、五十音言霊の原理に基づいて政治を行っていた日本の天皇（スメラミコト）のことであり、おばあさんとは日本の政治家・学者・宗教家と理解することが適当でありましょう。古代の天皇（スメラミコト）の政治の下で日本の国民は楽しく何の不安もない生活を送ることができた時代があったのです。

なぜ、おじいさんがはじめに家を空けたのか、

おじいさんが留守をした時、

雀がおばあさんの作った糊を食べてしまいました。この短い文章は歴史的にまた哲学的に大層深い意味を含んでいます。まず、おじいさんが留守をした、ということ。それは言霊がそのまま物事の真実を示す五十音言霊の原理に基づいて、政治を行う責任者であった天皇（スメラミコト）がいなくなったことを謂っています。実際の歴史的事実としてこれに当たるのは、神倭朝第十代の崇神天皇によって三種の神器の同床共殿の制度が廃止されたことです。（これに関しては日本書紀崇神天皇の章に詳しく載っています。ご参照下さい。）その時まで天皇の政治の規範であった五十音言霊の原理（その原理を器物として表徴したものが三種の神器の中の八咫の鏡です。）を信仰の対象として伊勢神宮に神として祀ってしまい、その心理の实体を日本人の意識の表面から隠してしまつた、ということでもあります。その時以来、日本人は次第に言霊の原理というものがこの日本を表徴する精神伝統であるということすら忘れてしまつようになりました。その時から日本（世界も同様）は弱肉強食の社会権力を持った者が栄え、力を持たない者が苦しむ精神的暗黒の時代が続くようになりました。

おばあさんの作った糊は何を意味しているか、

次におばあさんは糊を作りました。

昔の中国の老子という本の中に「大道廢れて仁義あり」という言葉があります。人間が人間の心とは如何なる構造をしており、その構造が示す行為の手順をしっかりと把握し理解しているならば、人として、国民として「こうしなさい、こうしてはいけない」と行為の基準を事細かに国家が規制する（仁義）必要はないはずです。大道である言霊の原理が世の中から隠されてしまった結果として、第二的な手段が必要となり、おばあさんである歴代の政治家や学者・宗教家が国民の守るべき教えとして則（法律）や教（教科書）・典（宗教経典）などを作ったことでもあります。

人間の生命の深奥の心理を、

把握し理解した人（聖い霊知り）が存在すれば、社会には難解な法律など必要ありません。法律条文は簡単なほど生きた働きをするものです。人間の魂が曇ってくればくるほど、悪の行為を規制するために事細かに法律を作る必要が起ってくるようになります。実際にはおばあさんがそれらの則・教・典を作ったのではなく、印度・中国・朝鮮などから輸入したのです。儒教・仏教・それに時代が下ってはキリスト教などがそれに当たることを日本の歴史が教えてくれます。

雀はおばあさんの糊（教）を食べました。

人々は生命の真理からみて二次・三次的な教えに基づいた社会の中に生活しなければならなくなり、その結果、上古の大和言葉の原理であった神の言葉が次第に話せなくなってしまったのです。日本国民は舌を切られ、外国からの借り物の考え方によって生きるより他に道はなくなったのです。泣く泣く唐（外国）の竹藪に逃げて行って、生存競争・弱肉強食の世の中で、しがない生活を送ることとなりました。現代までの日本人のことでもあります。

つひらの意味する秘密とは？、

時がたち二千年の歳月が流れました。昔、雀が楽しく竹藪で遊ぶことができた時のおじいさんが久しぶりに雀を訪ねてきました。言霊の原理が社会の底流から、また人々の潜在意識の底から表面意識にまで復活し、その原理を自覚し保持して政治を行う人が国民の前に姿を現わしました。おじいさんを迎え雀達は大喜びをしてご馳走し、雀踊りを踊って歓迎しました。この雀踊りのことを古事記は天の岩戸の前での天の宇受売あめうすめの命の神楽舞かぐらまいとして伝えていきます。

おじいさんは雀からお土産に、軽い葛籠と重い葛籠のうち軽い葛籠の方をもらって帰りました。開けてみると宝物が沢山入っていました。それを見ていたおばあさんは「私も……」と出掛けて行って、おじいさんとは反対に重い葛籠の方をもらって帰ってきました。そして開けて見ますと、汚いものや恐ろしい妖怪が飛び出してきたのです。

葛籠とは綴るということの謎です。言葉綴り合わせて社会的に世界的に文明を創造・運営して行くことを意味しています。軽い「つづら」とは言葉の一言一音が物事の実相を表わす最小単位である五十音の言霊そのものであり、一音が即真実でありますから、回りくどい解釈や概念説明を必要としません。そのため意見の衝突も起らず、人間の魂が歪むこともなく、自由自在に表現される軽やかな綴り（創造）であります。その葛籠を開けると（その創造力に則してみると）人間生命の原理に基づいて物質文明を自由にコントロールして、人類に繁栄と平和と福祉をもたらす色々な方策（宝物）が現われてきます。

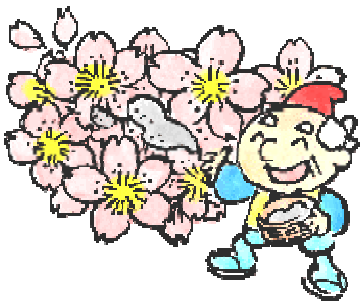
それなりに引きかえって重い「つづら」とは重苦しい学問知識の概念や希望的観測に基づく社会運営であり、考えれば考えるほど真実から遠ざかって行く学説や理論体系のことです。それを開けると、解釈の相違によって起こる紛争や戦争という厄介な汚物と化け物が飛び出していきます。この葛籠のことをギリシャ神話ではパンドラの箱と呼ん

でいます。ゼウス（又はヘルメス）がプロメテウスに贈った禍いの箱です。その中には宗教的・哲学的・道徳的な概念理論がいっぱい詰まっています、一見それらは立派そうに見えるので、その内容に興味を持ってしまい、その理論に基づき社会創造を行うと、苦悩・混乱が果てしもなく続きます。

以上「舌切雀」のおじいさんおばあさんと、

雀のおとぎ話は、古事記の神話に示された天照大神の岩戸隠れと岩戸開きの内容について説明した物語なのであります。言霊の原理はいよいよ新世界創造の原器として、その姿を人類の前に現わす時が近づいています。

花咲爺



ある所に正直なおじいさんと欲張りのおじいさんがいました。正直なおじいさんの飼っている犬が裏の畑で「ワンワン」と鳴いて此処をれといいます。そこで掘ってみますと宝物がたくさん出てきました。それを見ていた欲張りじいさんは犬を無理に借りていき、犬の鳴く処を掘ると汚い臭いものがたくさん出てきました。欲張りおじいさんは怒って借りてきた犬を殺してしまいました。

悲しんだ正直じいさんは犬を丁寧に吊って地の中に埋め、そのあとに松の木を植えました。その松はずんずん大きく育ちました。正直じいさんはその松の木で臼を作り、餅をつきました。すると臼の中からまた宝物がたくさん出てきました。それを見ていた欲張りじいさんは臼を借りていき、餅をつきました。すると臼の中から汚いものがたくさん出てきました。欲張りじいさんは怒って臼を割って焼いてしまいました。正直じいさんはその灰を集め撒きますと、枯木に花が咲き、大層美しくなり、それを見たお殿様から褒められました。欲張りじいさんがまた真似をしてその灰を撒きますと、咲いていた美しい花も枯れ、人々の眼や鼻や口に入って苦しめましたのでお殿様からきつく叱られてしまいました……とさ。

五十音の言霊原理で登場人物をみてみると……

こ の 花 咲 爺 の お と き 話 は 、

日本伝統の精神原理であるアイウエオ五十音言霊の学問と、ここ三千年来発達した物質科学的原理の研究とを対比させた物語とみることができます。人間は精神宇宙の五つの界層次元に住んでいます。五つの次元を五つの母音で表わします。

ウは欲望の次元で、この次元から産業・経済活動が起こります。オの次元は経験知で、これより学問・科学が出てきます。アは感情の次元で、宗教・芸術が興ります。イは実践智の次元で、道徳的政治が現われます。最後のイの次元は人間の言葉の原理である五十音の言霊が存在するところです。以上の五つの次元を頭に入れておいて花咲爺のおとぎ話をみますと、たいへん示唆に富んだ物語であることがわかってきます。

正直じいさんと、言霊イ（言霊原理）とエ（その原理に基づく道徳）を操作活用する人、欲張りじいさんとは言霊ウ（産業・経済）とオ（経験科学）を運営する人と解きます。正直じいさんの飼っていた犬とはイの奴ということで、イは五十音言霊の原理のことですから、イの奴とはその原理を操作・運用する人の意味となります。犬が鳴いた所を掘る、とは言霊原理に則って道徳の政治を行うという意味です。すると宝物が沢山出てきました、とは精神文化の花が咲き、平和で心豊かな社会が生れてきたということです。日本にも世界にも、三、四千年以前まではこのような精神文明の時代が実際に続いていたのでした。

しかし、魂が言霊のウとオと、いう境涯に限定されて生きている欲張りじいさんがその次元段階の法則に従って物事を運営しますと、結局はその意に反して汚いものがたくさん現われてきます。言霊ウというのは欲望の世界であり、言霊オは経験知の世界です。その人達は物質面や自分の経験したことの知識だけでしか物事を判断し、行動することができません。社会全体とか、世界人類全体の福祉とかいう立場には余り重きが置かれません。個人の経験に基づく見解が集まるところには必ず意見の衝突が起こり、度を越えた競争が始まります。果てには大きな戦争さえ起こります。そのように精神的に、物質的にいろいろな禍が現われてきます。

今日、政治や経済や、

環境の状況がよい例であります。このように物質主義の偏重される時代がくると、精神的な原理である言霊布斗麻邇ふとまにの学問は国家社会からは忘れられていきましました。言霊を操作する（イの奴ぬ）人、即ち犬は欲張りじいさんに殺されてしまいました。今日より約二千年以前第十代崇神天皇の時代のことです。正直じいさんと欲張りじいさんの対立はずっと続きます。正直じいさんは殺された犬を丁重に葬って埋め、その上に松の木を植えました。松が育って大きくなるつと、その木で臼を作って餅を搗きました。すると宝物がたくさん出てきました。松の葉はその元のところから二本に分かれています。一つの生命の内容を調べるには、まず陰陽二様に分けることから始まります。物事の真相はまず考える主体と考えられる客体に分かれて分析しなければなりません。松の葉の根元から葉が二本に分かれる形です。と同時に分析して内容が個々に確かめられたら、再びそれらを結合して元の姿に組立てることが大切です。分析と総合ができた時、初めて人はその物事の真相を全部は把握したことになります。松の葉の陰陽の分かれから、元の一つの根元に帰ることです。これを言霊の原理ではまつり（祭・政・真釣）と呼びます。

正直じいさんがついた鏡餅は精神理想体系の表われ。

、 正 直 じ い さ ん は 右 の

分析と総合という方法を表わす松の木で、臼を作りました。その臼で餅を搗きました。餅で上下二段の鏡餅ができます。人間の心を分析して五十個の言霊を手にししました。人間の心は五十個の言霊から構成されていることがわかります。この五十個の言霊が鏡餅の上段に当たります。その分析されてわかった要素の言霊を整理活用して、その総合の結果、政（まつりごと）の基準となる精神理想の体系が出来上がります。この整理・活用の方法がちょうど五十あります。この五十の整理法が鏡餅の下段に当たります。五十個の言霊とその整理の手順が五十、合計で百の原理、これを百の道で餅と呼びます。正月に床の間にお供えする鏡餅のことです。人間社会を運営して行く基準（鏡）となる百の道という意味の謎であります。臼とはその鏡餅を搗く道具、即ち方法のことを指しま

す。臼の語源の語につきましては長くなるので、ここでは省略します。鏡餅の上段である五十個の言霊を神としてお祭りした宮を伊勢の五十鈴の宮（伊勢神宮）といい、下段の整理法をお祭りした宮を奈良の石上神宮（五十神）と申します。

正直じいさんが臼で餅を搗きます。言い換えますと、言霊の原理によって政治を行いますと、人類全体の調和がとれた精神的な施策が次々に打ち出されてきます。宝物がざくざくと湧くように現われてきます。ところが反対に欲張りじいさんが真似て餅を搗きますと、物質的な利益を主眼にして、社会全体を無視した悪政と公害が地球上に現われてきます。臭い汚いものが湧き上がってきます。

おとぎ話が現在、そして未来を的確に予言する。

欲張りじいさんは怒って臼を焼いてしまいました。正直じいさんは臼の灰を集めて枯れ木に撒いてやりました。そうしたら枯木の枝に美しい花が咲き出しました。「枯木に花を咲かせよう」と正直じいさんは村や町に美しい花を咲かせて歩きました。

この灰は葉霊で言葉と心、則ち言霊のことです。新聖書のヨハネ伝に「太初に言あり、言は神とともにあり、言は神なりき。この言はよるす太初に神とともにあり、萬のものこれによりて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。之に生命あり。この生命は人の光なりき」と記されている言葉の言葉のことであります。生命即言葉の法則のことです。

正直じいさんがその灰を撒くということは言霊の法則に基づいた種々の政策と施すことであります。この原理に基づいて物事を運びますと、三千年の暗黒の歴史の闇を破って再び蘇

つてきた精神の原理と、今や完成に近づいている物質科学の原理の双方を結合した人類の第三文明の時代が実現し、この地球上に今までになかった豊かな生活と恒久の平和がもたらされることになります。

「これに反して、欲張りじいさんが、灰を撒く、言い換えると言霊ウ（欲望）とオ（経験知）だけを操作して物質優先に偏った施策を行い続けていくなれば、社会の生存競争はますます厳しくなり、人心は荒廃し、公害は増大し、地球上は生物の住む所ではなくなり、とどのつまり世界の核戦争という決定的破滅の事態を招くことになります。おとぎ話にありますように花を枯らすばかりか、人間やすべての生物が絶滅してしまいます。」

「欲張りじいさんの撒く灰は放射能の「死の灰」を意味しています。「花咲爺」のおとぎ話の作者は実際にそのことを予想して書いたのでありましょうか。現代という時点に立って見ますと、このおとぎ話は誠に恐ろしい的確な予言となっているということができましよう。」

桃太郎



「昔ある処におじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。川上から大きな桃が一つ流れてきました。持って帰ってその桃を割ると、中からかわいい男の子が出て来ました。桃から生れたので桃太郎と名付けました。桃太郎はすくすくと成長して立派

な若者になりました。ある日桃太郎は「これから鬼が鳥に鬼退治に行つて来ます」と申しました。おじいさんとおばあさんは日本一の黍団子を作つてお弁当を持たせ励ました。途中で犬・猿・雉・熊が黍団子を貰つて家来となりました。そして勇ましく鬼が島に乗り込み、悪い赤鬼・青鬼をさんざんに懲らしめました。鬼達は終に降参し、もう悪いことは致しませんと言つて自分達の宝物を全部差出しました。桃太郎は家来とともにその宝物を持つておじいさんとおばあさんの処へ帰りました。めでたし、めでたし。」

『お手許に』古事記』「上つ巻（神代巻）」が、ございましたら参考にして頂ければ幸いです。おじいさんとおばあさんの名前を伊耶那岐神・伊耶那美神といひます。創造主であり、言霊の神のことでもあります。おじいさんは山へ柴刈りに行きました。山とは八間のことで、人間の創造意志の知性が現われる根本のリズム（ヒチシキミリニの八つの父韻）のことで、柴刈りの柴とは霊の葉の謎で、昔言霊のことを一音で霊と呼びました。霊の言葉とは五十音の言霊を表わします。おばあさんは川で洗濯をしました。川の名を竺紫の日向の橋の小門の阿波岐原の川の瀬と言ひます。洗濯とは被禊のことです。『古事記』参照。言霊の数は五十個、その五十個の言霊をどのように並べたら人間精神の理想構造（鏡）が出来るかの精神的操作手順が五十あり、この手順を被禊といひます。合わせて百の原理（百道・鏡餅）のことです。川から桃が流れて来るといふ事は、被禊によつて百（桃）の原理が完成するといふ意味であります。そこで、桃太郎の中から桃太郎が生れました。

阿波岐原

ワ	ア
	オ
	ウ
	エ
ニ	イ
イ	リ
ミ	キ
シ	チ
ヒ	ヒ

つまり、百個の原理を理解し、この言霊法則を運用する人が生れたということです。百個の人間生命の根本原理で人類の歴史を創造して行く実行者であります。『古事記』「黄泉国」の章に「伊耶那岐神命、桃子に詔りたまはく、汝吾を助けしがごと葦原の中つ国にあらゆる現しき青人草の苦き瀬に落ちて、愚惚まん時に助けよと詔りたまひて、意富加牟豆美命」といふ名を賜ひき」とあります。梅若の狂言にある「桃太郎」は伝説の桃太郎のことで、その中でシテの桃太郎は自らを意富加牟豆美命と名乗ります。大いなる神の稜威の身という意味で、言霊の鏡（八咫鏡）に基づいて歴史を創造する神である天照大神（伊勢神宮の御祭神）のことを示しています。

桃太郎は健やかになり成人し、やがて鬼が島を征伐しに行く。鬼の「オ」は言霊オのことで、物時の関連性（緒・尾）を調べる人間性能のこと、鬼の「ニ」はその関連性を学問として第二次的にまとめて行くことで、そこから科学・産業の世界が展開して来ます。それは『古事記』に示されている須佐男命の支配する世界であり、人類に素晴らしい便利な生活の道具（宝物）を実現しました。と同時に権力闘争の道具に使われ、戦争による生命の危険、人心の荒廃、公害の発生等をももたらしました。何時までもこの宝物を鬼の独走の手に委しておくわけにはゆきません。天照大神の生命の原理の中に取り込まなければなりません。

おじいさんとおばあさんは黍団子を作って桃太郎に持たせました。黍とは伊耶那岐・美のことです。古事記の中で説かれますように岐美二神の結婚によって生れて来るのは、三十二の実相の単位である言霊子音であり、円満玲瓏な言霊の玉（団子）であります。五十個の言霊によって組織された人間精神神の完成体の鏡に照らし合わせることで、初めて科学の成果を人類の福祉に奉仕させることが可能となります。

桃太郎から黍団子を貰った犬（言霊イ）、猿（言霊ウ）、雉（言霊オ）、そして熊（言霊ア）、が家来となり

お供をしました（現在は熊が省略されています）。仏教で言えば仏陀に従う四天王のことです。この場合、桃太郎は原理（言霊イ）に基づいて言霊ウオア（欲望・経験知・感情）を自由に操作する実践者（言霊工）に当たります。

かくて桃太郎は四天王を従えて鬼が島を征伐しました。物欲と権力闘争に明け暮れしている世の中に姿を現わし、言霊の原理を高く掲げて世の矛盾を解消し、鬼が島の宝物である科学文明の利器が人類全体の幸福な生活に役立つ恒久平和の世界を実現させます。桃太郎の凱旋であります。めでたし、めでたしというわけであります。

以上、桃太郎のおとぎ話は

現在の科学文明が完成に近づいた時、その科学文明が、数千年以前己に発見され完成されている精神文明のエッセンスである言霊布斗麻邇の原理と共に車の両輪の如く相たずさえて人類の新しい第三の文明を創造する様相を予言した譬え話という事が出来るであります。